

定型作業の属人化を排除し バックオフィスへ多くの運用業務を移管

SAP ERPのグループ展開で大幅な工数削減を実現した大和ハウス工業

国内外に 360 社以上のグループ会社を抱える国内大手総合住宅メーカーの大和ハウス工業では、2012 年の SAP ERP 導入以降、順次グループ会社へ同 ERP を展開。その数は 30 数社にも上るが、Panaya のテストソリューションを活用することで、SAP のグループ展開時に必要となる作業を大幅に効率化。また、日々の運用保守での定型作業からの属人化の排除と標準化の促進を行い、その多くの業務をバックオフィスに移管することも実現している。

「攻めの IT」への姿勢が高く評価される 大和ハウス工業

「建築の工業化」を理念に掲げ、日本の住宅事情を一変させた総合住宅メーカー、大和ハウス工業。戸建住宅事業をコアに、現在では賃貸住宅、分譲マンション、商業施設、事業施設など幅広い事業領域で活動し、海外でも北米、オセアニア、ASEAN 諸国、中国などを中心として事業拡大に努めている。

建設や工場などの現場における働き方改革にも積極的なことで知られる同社は、ロボットや AI などの先進 IT 技術の活用にも挑戦している。こうした取り組みは各方面にも高く評価され、経済産業省と東京証券取引所が共同で選出する「攻めの IT 経営銘柄」にも、2016 年以降 3 年連続で選定されている。

SAP のバージョンアップをツールで効率化

大和ハウス工業では、制度変更への迅速な対応や、海外進出の強化といった背景から SAP ERP を 2012 年 4 月に導入し、2013 年からは国内グループ会社にも展開している。この SAP ERP の導入に際して、明確なポリシーを設けているのが同社の特徴だ。それは「Stay Current」、常に最新版を利用し続けるというものである。

「グループ共通の基盤システムでかつ新たなビジネスニーズに素早く対応していくことが目的だったこともあり、ERP にはできるだけカスタマイズを行っていません。これにより速やかなバージョンアップを可能にしようという考えです。これから本格化する海外グループ企業への展開では、SAP S/4 HANA Cloud を使い、まったくアドオンを使わず進めていきます」と、大和ハウス工業 情報システム部 次長の福嶋健氏



大和ハウス工業株式会社
情報システム部
次長
福嶋健氏



大和ハウス工業株式会社
情報システム部
管理系基盤 2 グループ グループ長
加藤 純氏

は説明する。

最初に行ったバージョンアップは、本社に SAP ERP を導入した翌 2013 年の SAP Enhancement Package (EhP) 6 適用だった。このとき、作業を効率化すべく専用のツールも導入している。それが Panaya のソリューションだ。情報システム部 管理系基盤 2 グループの加藤純氏は、以下のように説明する。

「Panaya は当時すでに豊富な実績があり、SAP ユーザーの間ではバージョンアップ工数削減に大きな効果があるとして知られていました。調べてみても他にこのようなツールはなく、トライアルを通じて評価し、採用を決めました」

Panaya の効果は非常に大きなもので、2013 年の EhP6 適用時には、「感覚値で 80% 以上の削減効果」を得ているという。大和ハウス工業ではその後も Panaya を活用し、2014 年の EhP7 適用や、2015 年に実施した新規モジュール導入時の影響調査など、毎年のように大きな効果を挙げてきた。2017 年には、最新バージョンへの EHP8 へのアップグレードもわずか 2 カ月で完了させている。

国内グループ企業への展開にも Panaya を活用し多大な効果

Panaya は近年、その機能が大幅に拡大され、大和ハウス工業では、SAP ERP バージョンアップ以外の場面でも活用し始めている。その1つが、国内グループ企業への SAP ERP 展開だ。国内外に多数のグループ企業を抱える同社では SAP ERP 導入当初からグループ展開を強く意識して取り組んできた。展開に際しては、自社での展開手順を整備してテンプレート化し、導入の効率化、短期間での導入を実現しているという。

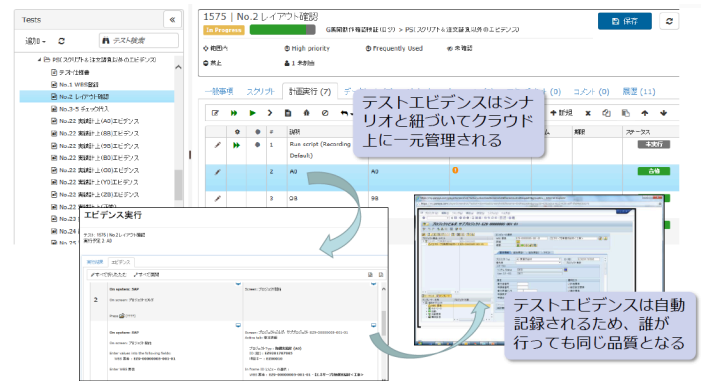
「同時に複数社へ実施しているグループ展開では、個々のプロジェクトを我々が全体をコントロールしています。プロジェクトメンバーも掛け持ちです。課題があるところや進捗が遅れがみられるところには当社から人材を送り込んで支援するといった体制です。テンプレートもアップデートし続け、手順もかなり洗練されてきていますが、そこへさらに、Panaya テストソリューションを取り入れることで、大幅な工数削減を実現しました」（加藤氏）

導入確認作業の工数では、当初は 90 人日だったのに対して 38 社目での見積もり想定工数は 40 人日となっていた。4 年間かけてテンプレートを洗練させてきた成果だ。さらに、そこに新たに Panaya のテストソリューションでテスト作業を自動化することで実績工数は 24 人日となった。想定工数に対し 40% も効率化したことになる。

脱「属人化」が人財の異動や 業務移管、新領域への挑戦を可能に

大和ハウス工業では、定型作業の標準化・自動化、運用保守コスト削減といった課題に対し、脱「属人化」がテーマになると考えていたが、前述したグループ展開での Panaya 活用も、既存テンプレートに基づく自動化や作業品質の均一化などを通じて、それに大きく貢献している。

コスト削減、業務効率化に向けた取り組みの1つとして、アプリケーションマネジメントサービス (AMO) の利用とは別



Panaya のソリューションでテストエビデンスの標準化、および属人性排除を実現

に、バックオフィスを 2017 年に立ち上げている。

「これまで社員や AMO が行っていた SAP ERP 運用保守に関する定型作業を手順化してバックオフィスに移管することで、社員には、より重要な業務に向かってもらいたいのです」と加藤氏は話す。

ここでも Panaya が大きな役割を担っている。自動キャプチャ機能で作業証跡を記録することにより作業品質の均一化に役立つほか、自動文書化機能により作業マニュアル作成が容易になり、定型作業の属人化を排除する効果をもたらしている。バックオフィスへ移管できる業務は全体の 1/3 に上るが、現時点でそのうちの 90% の移管が完了している。また Panaya の操作を習得したバックオフィス要員も自律的に定型作業のさらなる効率化・自動化の提案を行っており、さらなる改善が生まれているという。

さらに、Panaya の効果は構築・開発においても検証が行われた。Panaya テストプレイヤーの活用でテストデータ作成を定型化・自動化し、人に依存しない体制を構築できることがわかったという。

「定型業務を Panaya に任せることで、人間はソリューションそのものに意識を向けることができるようになります。当社は人財育成を重視しており、最近では、特に若い世代の社員のシステム企画・開発する上でのスキル向上を図るため、経営分析など変化が激しくスピーディーな対応が求められるようなシステム開発には、社内リソースで開発しようとしていません。そのための時間を作る上でも、Panaya のようなツールの存在は重要と言えるでしょう」と福嶋氏は話している。

Panaya Japan株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木1-6-3 泉ガーデンウイング
お問い合わせ Info.JP@panaya.com
<https://www.panaya.com/>

すべての製品名、サービス名、会社名、ロゴは、各社の商標、または登録商標です。製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。